

【佳作】

遮光

折った身体のかなかを寝ぼけた熱が走り回っている。朝だ。転がる空き缶と空のカップラーメン。麻痺したような感覚に悶えながら足を伸ばすと、それらはさらに奥に転がっていく。瞬間、寒さがあるりと足元を掴んだのを感じたため、リモコンを手繰り寄せ暖房の電源を入れて立ち上がる。トイレに行きたい。床が見えないほどに散らかっている部屋の状態が目映り心底不快だが、片付ける気力は無い。落ちているものを何度も踏んできた歪な一本道の上を仕方なく、ゆらゆら、歩く。カーテンの隙間から漏れる光に埃が照らされている。つけっぱなしのパソコンから流れる繰り返し

のBGMが呑気な世界観を演出している。ここは私の楽園だ。誰にも壊させない、私の楽園だ。

いつからか、私は外に出ることができなくなった。いや、出なくなつた。理由はこれといってない。「明日こそ」が積み重なつてしまったという。ただそれだけであつた。もう子供ではない人間がただ日々を浪費するこの部屋に慈悲を与える者はほばいない。再度寢床に戻り、未だに動いている

パソコンを覗き込む。チャットに五時間前という表記付きで私の名前を呼ぶメッセージが数個、送られてきていることに気づく。「ごめん寝オチ」と返信してパソコンを閉じる。さつきまで流れていた陽気な音楽がいきなり消えてしまうと、途端に地に足着いてる感じがして怖い。無意味に大きく息を吐く。何も生まれない。

何か情報がほしくてカーテンを開けても、この時期は色彩を失った草木を空つ風が揺らしているのしか分からない。空虚のなか、日々は容赦無く過ぎ去るのだという事実をここでひとり受け取っている。

やつぱりなんだか物足りなくなつてもう一度パソコンを開くと、「仕事大変つて言つてたもんね、ゆっくり休め!」と返信がきていた。

「仕事が大変」。少し前についた嘘であつた。そのメッセージを見ると不思議と口角が上がる。ここはすごく幸せな場所なのだ。手を伸ばせば欲しいものが手に入り、少し自分を演出すれば欲しい言葉が手に入る。それは私が築き上げた楽園を強固なものにするには十分であつた。その度に、あまりの馬鹿らしさに消えてしまいたくなくなること

目を瞑れば、ずっとここにいたいと思う。暖房の生ぬるい熱が首もとを撫でる。ここは暗くてあたたかいから、膿んでいく傷が見えなくて良い。でもずっと、なんとも言えぬ閉塞感が背後から私を睨んでいる気がするのはどうしてなのだろう。

もうゲームをする気は起きないので小説を書く。

これを始めたのは何年も前のことだった。チャットを閉じて執筆に使っているアプリを開く。自分の考えていることを文にするのが好きだった。自分が紡ぐ物語のなかで息をするのが好きだった。表現の方法は、きっとこれじゃないと駄目だった。最近では自分が書いたものをサイトに掲載するようになった。それが何年も続いて着実に作品数を増やしているのだから、特に何か成果をあげたわけではないけど誇りに思いたい。

画面の明るさとずっと向き合うことにも慣れてしまった。想像する。別の世界を生きる人々のこと。頭のなかに浮かぶ言葉たちが画面のなかに書き込まれていく。キーボードの小さな音がひたすら耳に入ってくるが鬱陶しさはない。

外国語学部 英語英文学科2年 菊池 暖

小説を書いているとき、私は言葉たちが自身の足元から頭のとっぺんまでゆつくりと包み込んでくるのを感じる。それは大きな壁となって私と外の世界を切り離す。その繭のようなもののなかで息をすると、心が軽くなる。私は自分のことが好きではなかったけれど、この感性を持って生まれたことに対しては酷く高揚していた。おかしな話だが、この瞬間だけは、自分を強く抱き締めたいぐらいに好きになれるのだ。

私に想像する力があって良かった。
この行為は確かに私を守ってくれる。

確実に先ほどよりも増えた言葉を見ると嬉しくなる。増えた文字数は行動の結果を感じられるから好きだ。そこでお腹が鳴る。昼頃になると全く動いていないのに決まってお腹が空く。何かを口にする 때마다生きているという、それだけが露わになって気持ちが悪いくのであまり気乗りはしないが仕方がない。

重たい腰を上げ、部屋の隅を漁っているとクッキーが数枚入っている開けたままの袋を見つけた。それらを一気に掴んで、立ったまま咀嚼し胃に流し込んでおいた。ばさばさとした感触だけが、舌の上につつと居座っている。

他に開けたままの食べ物を放置していないかと、重なる衣服や本を別の場所に放り投げていると指先が先ほどまでは違う感触の何かに当たる。その正体を見ようともう少し物をどかしてみる。

人形だ。サンタクロースの格好をしたクリーム色の髪の毛の素朴な人形。そこそこの大きさのそれは、姿勢を崩すことなく息を潜めるようにしてきちんと座っている。しつとりとした布地の服を纏ったそれを持ち上げて顔を覗き込むと、穏やかな笑みを浮かべて彼女も又私を見ていた。

こんなところに放置してしまっていたせいで、彼女は埃にまみれていた。頬にのる埃を手で拭おうにもこびりついてとれない。懐かしい再会に頬が緩むのを感じ、彼女をベッドまで連れていき、パソコンの隣に置いて見つめ合う。黒く丸いビーズの眼はやはり私をしつかりと捉えている。懐かしい。この人形は亡くなった祖母の家にあったもので、捨てるのも気が引けると持ってきたものであった。この子の髪は、みつあみにアレンジされている。しかし片方だけ、不器用なみつあみ。元々は両方とも綺麗なみつあみだったのだが、幼い私が悪戯をして片方のリボンをはどいた上に、そのリボンもあそびに遊んだ末何処かに無くしてしまった。それを見つけた祖母は私を叱ることなく、一緒に結ぼうと言ってくれて、母が小さい頃に使っていたというゴムを持ってきてくれた。それは伸びきっていたけれど、そんなことはどうでもよかった。

「ねえ、あなたは外にでないの」
わざとらしい高い声。

「でないよ」

「どうして？」

「別に理由なんかないよ」

「……」
「……」

そんなことを思い出しながら一人劇。人形と向き合って、触れていると、私の方が動かされている気分になるのは何故なのだろう。あなたに触れている間は、この心の曇りを分かち合っているような。

……子供でもないのに何をしているんだか。変に冷静な気持ちになってしまったため、書いていた小説を保存してニュースでも見ようとネットを覗く。最近は全くテレビを見なくなってしまうため、今現在外で何が起きているのかを知らない。こうやってニュースを確認したのは一週間ぶりくらいだろうか。

一覧を眺めていると、当然のことながら一週間も前の出来事なんか全く残っておらず、画面は新しい出来事で埋め尽くされている。楽しいことからそうでないことまで。実際に自分が生きている世界での出来事だけど、断絶したような感覚はやはり拭えなくて、どこか違う世界を傍観しているようなそんな気持ち。画面のなかの世界は目まぐるしく変化していく。私はじつとここで固まっている。

ひとつ適当にニュースを選んで何気なくコメント欄に飛ぶと、「社会不適合者」とか「死んだ方がいい」とかそんな言葉たちに迎えられる。各々が各々の正義を惜しみなく振りかざしていた。そのコメントたちが忌み嫌うその人が、自分の今の状況と重なる。

他者への批判の眼差しと声は、その解像度を低くして、私自身に突き刺さってくる。

他者の言葉が侵入してくるその感覚が嫌で、置いていた人形を手にとって埃だらけのその身体を抱き締めると、たん、と高い音が響いた。驚いて彼女の身体を見回すと、背中に白いつまみがついていることに気づく。そうだ。彼女のなかにはオルゴールが入っている。

そのつまみを回して手を離してみる。最初は上手く音が出なかったが、軌道に乗ると弾ける優しい音。心地良いリズムに、彼女が首を回すしきりとした音が絡みだす。時々音を止めながらも流れる不器用な彼女のうたは部屋を満たしていく。目を瞑る。音に乗って私の元にくるのは懐かしい記憶だった。大きな一軒家の縁側で走り回ったあの感覚とか、畳の匂いとか。そんな、些細なことで。セピア色の風景と、ちよつとした孤独が同居するひりひりした感覚が私に襲いかかる。それは幸せに少し似ている。この人形は私に似ている。だから何かを分かち合った気になったのかもしれない。じつと暗いところで息をして、幼さが拭いきれない。

「おばあちゃんね、せーちゃんが立派な大人になるの、すごい楽しみなんだよ」

「せーちゃんはいいい子だから、おばあちゃん将来が楽しみだわあ」

みつあみはこうやるのよと、重なる手。微笑む

絵画のような顔。頭に亀裂が入るような衝撃に思わず目を開ける。

実際に目に映るのは美しい記憶でもなんでもない、おぞましいくらいに閉鎖的な部屋。

「立派な大人」。今の私の姿とは対極的な位置にある気がする。罪悪感が背後にいます。

違う。私はちゃんと大人になった。それで、自分を守りたかったけれど守る術がこれしかなくて。人並みであろうとしたけど望みだけがいつも先に走っていつてしまう。将来とか、恋とか、責任とか全部全部、私には重たくて怖かったから。

逃避は楽しい、ずっとここにいたい。ここに閉じ籠っていたい。ここはすごく綺麗だ。私は汚いのは嫌いだ。ここはずっと綺麗だ。ずっと。ずっと。

人形のオルゴールは止まない。その音より美しいものが存在しない私の部屋の汚さが強調されていつて、露わになって、苦しい。繭がふやかされてほどこけていく。現実と向き合えと。洗わなくなった食器も、端に追いやられ臭いを放つゴミたちも、こびりついたラーメンの汁も。床につもり積もった、見ないフリをしていたやらなければいけないことが競り上がってきてこの部屋と、私を飲み込んでしまうのではないか。漠然とした不安だけが募る。

ここは私を守ってくれるはずなのに。オルゴールが止まった。

思い出は時に私を刺す。楽園は自分自身の手によって壊れていく。ふつと息を吐くその瞬間のようにそつと死んでしまえたらと望んだ一昨日と、何も成し得ず死んでいく自分をただ布団のなかで怖がった昨日。

私の感性と想像は、私を優しく守ってくれるけれど同時に心をそつと締めつけるのであった。

このままじゃいけないことは、分かっていた。

あまりにもここにるのが苦しくて、このままではいけないと思って私は立ち上がり、一歩、一歩、足の裏にまとわりつくよれた衣服や投げ捨てたゴミを払いながら歪な一本道の上を歩く。それは逃げるようでもあった。部屋のドアを開けて、下の階に降りるとキッチンから物音が聞こえてきた。母親だろう。何か言うべきだろうかと思つたが、先日あまりにも執拗にドア越しに話しかけられたものだから、干渉されたくなくて大声で怒鳴り付けてしまった。今は会わせる顔がない。後で、何か言わないと。

玄関に置かれた適当なサンダルを履き、扉と見つめ合う。冷や汗が出てくる。ここまで出てきたが、怖い。ここを開いたら何が起きてしまうのだろうか。普通の人が毎日やっている行為をなぜ私はできないのだろうか。

自室から漏れだした息苦しさが後ろから自分を

追いかけてきているような気がする。目の前の扉を自分の力で、開けなければいけない。

開けろ、開けろ。開けろ。

曇り空がこちらを見ている。一步、踏み出す。こんなにも震えている。空気が冷たい。喉から、鼻から、体の中に入ってくる。玄関に落ちていた黒い上着を掴み羽織ると少しましだろうか。

ゆっくり玄関を閉めて私は歩き出した。

目の下がじんわりと痛い。今自分は真っ直ぐ歩いているのだろうか。周りの人の視線が気になる。みんな私を睨みつけている気がする。現実に触れている感覚はあまりなく、未だ夢の中にいるような感じもする。

外は昼間よりもだいぶ暗くなってしまった。大きく広がる空は様々な藍が伸びやかに、ただ伸びやかに。その藍を背景に道路沿いの木の枝の輪郭がその先の方まではつきりと見えて、その美しさをただ受け取った。空は自分が思っていたよりもすごく高く、高く。きつと私がいくにはまだ早い。それを突き破るくらいに鋭く高い建物はいつだって綺麗で美しい。

とりあえず、行く宛もないが歩く。通りを抜けて、川沿いの方へ。理由なんてない。ただ、変わったのなら、と思った。

川沿いへの近道らしい地下道を見つけた。その地下道は短く、四人も横に並んで歩けないくらいに狭い。先の方の景色がもう見える。

「バイク進入禁止」と書かれた看板とボールの間に潜り抜けて、歩いてみる。安っぽい煤けた電球が控えめに地面を照らしていた。壁には小学生が描いたと思われる絵が長く続いていて、それを眺めながら歩く。子供たちの目に映る世界。淡い黄色や思いのままにのせた青色を背景に様々な生物が描かれている。タコの隣にはイカが並んでいて、その隣には人魚がいる。もう少し進むと街の絵が描かれていた。いくつもの花が大口を開けて笑っている。うねる道の周りには大きな赤色の屋根の一軒家がたくさんあって。目を閉じて想像してみる。誰も劣等感とか、そんなものを感じなさそうなくらいに愉快な世界だ。

でも、最初からそんな世界であつたのなら、私は今の私だつたのだろうか？

きつと全く違う人になっていて、もしかしたら小説なんかも書いていないかもしれない。

今の自分の状況は決して良いものとは言えないけど、心を預けられる、想像があつて良かったと思う。

地下道を抜けてすぐ横にあった階段を上る。スプレー缶で書かれたであろう一つ目の怪獣の絵と死ねという文字が静かに、そんな私を見ていた。階段を上りきると目の前には橋があり、川がその切れ目を確認できないほどにどこまでも続いている。

る。

橋に向かって歩き、その真ん中で歩みを止める。風によってすぐわれる前髪をおさえながら欄干に手を置いて呼吸を整える。そのまま橋の下を覗き込んでみると、兄弟だろうか、二人の子供が川に落ちているゴミを拾っていた。お揃いの赤いダウンが伸びきった草の合間をするする走り抜けていく。ビニール袋を持ちながらゴミを拾えばいいのに、ゴミを拾っては、ビニール袋の方へ走って。その繰り返し。それがなんだかおかしくって、でも愛おしくて、どうかあの子達が幸せになりましょうように、幸せでありますようにと心のなかで願ってしまう。私にはそう願うことしかできないから。

前を向いてもう一度深呼吸をする。風にさらわれる前髪を抑えるのが面倒くさくなって、あらがうのをやめて、風をからだいっぱいにくうてみる。先程よりかは呼吸が上手くできていく気がする。冬の匂いをお腹いっぱい吸い込むと、思い出しにくいことまで思い出してしまいそうになる。少しくぐもった冷たい匂い。頭のなかで溶けていく。

目の前には幾分赤を混じらせた空。藍と調和して優しい色になっている。遠くの方で日が沈みかけているのが見えて、その光景の懐かしさと不変さに鼻の頭が熱くなる。そんな私の後ろを仕事や買い物、学校帰りの人が通っていく。自分たちのこれからを思いながら。外の世界はやっぱ目ま

ぐるしい。

水面には今日も人々の生活が映っている。純粋な眼を持った人々で溢れている。再三打ち碎かれても夢を見る。

睫毛にのる光が、今の私にはあまりにも眩しすぎる。

コメント

最後まで読んでくださった方、ありがとうございます。

目まぐるしく移り変わる世界と進めない自分について、時折考えることがあります。街に出ると、みんなずっと歩みを進めているので、すごいなあと思うのです。でもきつと、そこには他者にはわからない葛藤や悩み、明日があるのだと思います。

いつか、きらきら光るものを自身の目でしっかり見ることができるよう、少しずつ、少しずつ歩みを進めていきたいです。